

ブエノスアイレスの IHPBA (国際肝胆膵学会) 参加記

木村 理

山形大学第一外科

<特別寄稿>

ブエノスアイレスの IHPBA (国際肝胆膵学会) 参加記

木村 理

二村雄次プレジデント(写真1), アルゼンチンの De Santibanes 会長のもとで行われた IHPBA は, Helton 会長の AHPBA (アメリカ肝胆膵学会) との同時開催となり 4 月 18 日のウェルカムレセプションにはじまって 24 日まで行われた。しかしその直前の 4 月 16 日に起ったアイスランドの山の噴火という予想外の出来事により, 大きく予定が狂うものとなった。すなわち, イギリス, フランス, ドイツなどヨーロッパの空港の大部分 (ヒースロー空港, フランクフルト空港, パリの空港など) が一部のヨーロッパの南の方のローマ空港などを除いてすべて閉鎖する事態になってしまったため, ヨーロッパからの参加者がほとんど来られない状態になったのだ。またアジアからの参加者もヨーロッパ経由を予定していた方々は参加が困難な状態となった。

学会本部にも動揺がみられ, ヨーロッパから来られない座長や演者の補填に頻繁に首脳会議が開かれていた。それにも関わらず IHPBA は盛況をきわめていた。約 2000 人の出席者と, 充実したディスカッションなど, 企画はみごとであった。学会は興味ある主題で満ちており(写真2), free paper session も立ち見が出るほどの盛況ぶりであった。時間はかなり守られており, スムースでスマートな会の進め方も洗練された会であることを示していた。また, 今回はポスター発表のディスカッションも座長がついて 12 時から 14 時 30 分の 2 時間半に渡って行われた。もちろん, 発表者のいない所もあったが, 多くは活発に議論が行われており, 深められていた。ポスター発表に来た医師たちの満足感もやりがいもひとしおであったであろう(写真3)。

私は当初, 19 日(月曜日)の良性膵腫瘍における膵温存手術のディベート(30分)と 21 日(水曜日)の Vater 乳頭部腫瘍の司会(90分)が割り当てられていた。ディベートのところを終了してほっとしていたところ, Ampullary adenoma の司会のところで急遽, 講演もすることになり, 前日から用意を始めた。この分野はちょうど数年前に 30-40 分程度の講演を国際学会



写真1 ウェルカムレセプションにおける二村雄次理事長のご挨拶

で何度かしていた分野でもあったので比較的スムーズに形にすることができた。内容は剖検例の異型上皮の部位別頻度, 癌のタイプ別術後生存率, Vater 乳頭部の局所切除の方法などを報告し, ディスカッションもしっかりと行った。特に局所切除の手術手技についてはしっかりと要点と利点を述べさせていただいた。

学会全体を通じて, 私が主として参加したのは膵臓の分野であったが, このシンポジウムやディベート, レクチャー, キーノートも腹腔鏡下膵切除の適応と結果, 膵切除後の残膵の閉鎖法, 膵臓外科の挑戦, 良性膵腫瘍の手術, 膵癌に対する術前化学療法, 家族性膵癌のサーベイランス, 小嚢胞, 分枝型 IPMN, 等々さまざまであった。いずれも興味深く拝聴することができた。

夕食は企業展示のコーナーなどを利用して, また会場の外側を利用してさまざまに行われていた。展示コーナーではアルゼンチンタンゴの講習も行われていた。プレジデンシャルディナーは会場とは別のホテルで行われたが, 国際学会によくあるように, 食事が終わるか終わらないかするうちに会長自らアルゼンチンタンゴを踊り始めたりして, ここでもたいそうな盛り上がりを見せていた。22 時ころから食事が始まるので, 日



写真2 充実したディスカッションなど、企画はみごとで興味ある主題で満ちており、free paper session も立ち見が出るほどの盛況ぶりであった。



写真3 ポスター発表のディスカッションも座長がついて12時から14時30分の2時間半に渡って活発に議論が行われており、深められた。

本人には夜遅いのがきつく、私は何人かの仲間と早めにタクシーで自分のホテルにもどってきて、翌朝の講演、司会に備えた。それでもホテルについたのは24時頃であったが、会は27時近くまで行われたと聞いた。

アルゼンチンは、本年が独立200年ということで、アルゼンチンタンゴで有名な国である。ウエルカムレセプションでは二村先生(写真1)、Helton 会長、De Santibanes 会長の挨拶の後にすぐにアルゼンチンタンゴのショーが始まった。帰りの空港へのタクシーのなかでも運転手がカンタオーレだとかいって、自分でもラジオに合わせて、あるいは無伴奏でタンゴを歌い出してしまうほどであった。

私が南アメリカに来たのは初めてであったが、3日間ほぼホテルに缶詰状態で学会に参加し、ヒルトンホテルから歩いて10分ほどの所にある大統領府を医局員と見学したくらいであった。それでも夕食やあるいは昼食にアルゼンチンのアサードという骨付き牛バラ肉など自慢の肉料理に舌鼓を打った。肉はウエルダンでやや固めであったが、やや甘めのワインとの相性が絶妙であった。

せっかく南アメリカに来たのだからと世界遺産の三大瀑布の一つ、イグアスの滝を見に行ったグループもみられたようだ。